

史談

2011 (H23) 6・25

■ 総会、開かれる

さる18日、中央公民館において、白鷹町史談会の23年度の総会が開かれました。

総会では22年度の事業・決算の報告、23年度の事業計画・予算案がそれぞれ承認されました。今後当会も高齢化に伴い、会員の減少が予想されますが、町史編纂の話もでている折柄、会員の拡大をはかるべく、知恵をしぼりや新企画などを期待したいものです。

総会后、会員の川村正さんから「東根小学校の木造校舎について」の講話を伺いました。

■ 『史談』26号と、会報・13～17号ができました。近いうちに郵送か、会員による手渡しでお手元に届くかと思えます。

なお、23年度分の会費の納入が未納になっている方、事務局までお願いします。

■ お詫び・会報13の中に誤りがありました。

誤		正
江口敏雄	→	江口俊雄
菊池春子	→	菊地はる子
菅原光一朗	→	菅原光一郎

お詫びして訂正いたします。

■ 『史談』と会報に原稿をお寄せください。

史談会では、随時、原稿を募っています。内容はいままでの『史談』や会報を見ての通りで、まったく問いません。長さは、会報が1000字程度です。

特に今回の震災以降、世の中が大きく変化しつつあります。日常生活の中味はもちろん、物の感じ方や考え方が変わりつつある今こそ、「注意深く観察して、記録する」ということが大事になると思います。

この際、ぜひ挑戦してみてください。問い合わせは事務局、会の役員、もしくは丸川まで。

■ 片付け

時間があつたので、ふだん手をつけられなくていただ本棚とそのまわりを片付けた。なんと一杯のもので、特にPR紙がかなりある。図書、ちくま、百科、みんな、一冊の本、草思、歴史手帳など・・・。

今回気がついたのは古い冊子の金属のジョイントがかなり腐っていて、ボロボロになっていたものがあることだった。いつか、将来は紙が劣化すると騒がれたことがあつたが、それよりもこっちの方が早く進んでいる感じである。もっともこれは置き場所やその状態によっても異なるだろう。

また読む機会などあるか、どうか。それぞれの一冊をのぞいていたら、日が暮れてしまう。結局、ほこりを払って別の場所に積んだら、かえって量が増えたような気がした。これでは片付けにもならないが、どこにいったか探せなかった本が見つかったから、まずはやらないよりはましだと思っている。(松)

■ 「3・11以後」・断章

3

はたして今回の原発の事故では、原因を一つ、二つに特定できるのだろうか。そして、私たちにもその原因にいくばくかの責任があるのだろうか。あるとすればどの程度のもので、遑つての弁済など可能なのだろうか。また、国策という言い方に従えば、その時々政治体制を選んできた人たちの責任も問われるのだろうか、そんなものは時が過ぎてしまえば、あつても無きがごとくのもので質しようがないだろう。だからといって今の為政者の中から首くくる者が現われるとも思えぬし、くくつても間に合う話ではあるまい。結果としてはどこかで騙されたか、取り引きで納得したかであろう。

こうなると、押しなべてあらゆる「学問」というものも胡散臭いものに見えてくる。たとえば、「津波が来たら高い所に逃げろ」という伝承ですら、時がたつと忘れられるのである。昔はラジオもテレビもなかったから、年寄りの経験と知恵しか頼るものがなかった。それは「ことわざ」や「なぞなぞ」となって、子供たちの頭に遊びを通してしみこんでいったのではなかったらうか。

いつだったか父は「世の中は昼と夜でできている」といった。そんなことは当たり前だとその頃は思った。しかし気がついたら、このところ私たちの周りから夜がどんどんなくなっていた。「大きいことはいいことだ」というCMがあったが、即ち、大きいとは明るいということだった。家の中は昔とは比べ物にならないくらい明るいし、便利になった。と、いうことは即ち電気を使うということだったのである。

しかし、やはり世の中は「昼と夜」でワンセットなのであって、昼には昼の、夜には夜の役割があるのだ。つまり、世界の半分が夜であるということは、世界の半分は「見えないものの存在でできている」ということなのだ。むろん世界のすべてを明るくすることはできないが、仮に昼だけにすると「見えないものは存在しない」ということにならないか。否、意識しないだけであって、そう思っているのかも知れない。しかし、考えてみれば肝心なものは、みな見えないのである。空気、重力、電気、心、愛、神や仏など……。見えるものの方が危うい、とこのごろ思う。(川)

■ 「五郎四郎」のこと

長井市の九野本地区の中に「五郎四郎」とよばれている家と土地がある。

それは、ひとつには近くにある観音寺の住職のことを書いた古い新聞記事の中にでてきた。と同時に、あれこれ人に聞いているうちに、土地の人の「ゴロッショ」という言い方になってあらわれた。

新聞の方は、観音寺の中興開基という人に「梅津五郎四郎」という名前が出てくる。こうなるといかにもそういう名前の人がいたように思うが、訪ねて聞いてみると名乗った人物はいないらしい。

そう呼ばれている家は旧家で、確かに今も「屋号」で「ゴロッショ」といわれている。家の周りにはみな自分の家のもので、そこは土地改良で整理する前までは字切りの図面でも「五郎四郎」となっていたという。ただ家は代々「中弥」を名乗り、襲名もしていたといい、仏の中に「五郎四郎」という俗名の人は見当たらないというのである。

むろん何事もすっきりとわかるはずもないが、それ

でも地名の由来やその背景を考えると府に落ちないものが残る。ちなみにこの地名をネットでみると、京都の綾部市と相馬の新地町に出てくる。さて、この地名の由来は何から辿ればわかるだろうか。(竹)

■ アカメショパイナ

題は「田のカカシ」という歌の文句の一部である。

田のカカシ

今こゝ色チャン通らなかつたべか

私雀も晩だもの

色チャンのことなど

アカメショパイナ

という文句が、50年余り前の古い新聞に書きとめられている。文章の前後からしてお座敷での俗曲か、酔った商家の旦那が座興に歌ったものらしいが、どんな節まわしか、後の文句はわからない。

たわいない歌の一節には違いない。しかし、それはこの中の「色チャン」の「色」という言葉をどう解釈するかによるだろう。「色」というと現在の私たちは「いやらしい」や「汚らしい」と重ねて使うが、一方で「色気がある」というようにも使っている。つまり、「色」は元来、単なる「好色」という意味とは違い、「立派な婦人の特色」と解した時代があったのである。「歌は世につれ……」というから致しかたないが、このごろはどういうわけか、とんと「色気」のある女性にお目にかからなくなったと思うのは、自分が年をとったせいだろうか。(梅)

■ 狂歌・その他

東海の海辺の町原発に

我ら泣きつつ犬とたわむる

白川ノ啄木

ちはやぶる神代のことは知らねども

たぎるアトムを手繰るたくらだ

高見ノ法師

ひさかたの光をのどけき春の日に

虫干しすれば淡き文いず

よみびとしらず

食えば出る出ればぬぐうの命かな

田ノ尻